

入れ替わる銀行像 (新生銀行上場に思う)

東京駅八重洲口を出て八重洲通りに入ると直ぐその店舗はある。かつて仕事で何度か尋ねたことのあるその店舗は、私達の感覚からするとまるで銀行らしくない。絨毯を敷き詰めたようなフロアーにはお客の姿は見えない。高級感を感じさせる個室のような所で銀行員らしき人と顧客らしき人が話をしている。一瞬場違いな所に来たような感覚に襲われる。と、中年男性が近寄ってきて「ご用件は」と優しく語りかけてくる。「あの一、パワー・フレックスという口座の申込書を頂きたいんですが」と云うと、傍らの台座に置いてあったA4版の封筒を取り上げ「ここに説明と手続き書類が入っております」と渡してくれた。口座開設書類にしては分厚いその封筒を受け取ると、そそくさと私はその店舗を出た。

丁度1年くらい前、新生銀行東京支店を訪れた時のこと。かつて見知った長銀東京支店と様変わりしていることに驚いた。

その新生銀行が19日、東証一部に上場した。当日のTV、昨日の新聞でも大きく報道されたので私などが改めて云うまでもないが、19日の株価終値(827円)が東京三菱銀行の株価とくしくもぴったり重なったことにある種の暗示を感じた。発行株数が違うので時価総額では遠く及ばないものの、市場は新生銀行と東京三菱を同等に評価したことになる。ご祝儀的動きによる一時的現象かもしれないが、それでも今後の新生銀行の株価推移は、日本の銀行のこれからの動きに大きな影響を与えるのは確実だと思う。

何故なら、ここ数年、新生銀行のビジネススタイルをメガバンク等呼ばれる日本の主要銀行が追いかけるという現象が続いてきたからであり、今後もそうなる可能性が高いように思われるからである。

新生銀行をめぐっては、巨額公的資金の投入、外資系ファンドへの瑕疵担保条項付き売渡し、その後の徹底した不良貸出金回収、それに伴う金融秩序混乱(そごう破綻の引金を引いた)等々から、様々な見方がされてきた。その代表的なものは、「ハゲタカファンドが日本を喰い荒す」と表現してよいものだった。そのハゲタカファンドが今回

の新生銀行上場で巨額売却益を手にした訳だが、これを感情的に見ると本質が見えなくなってくる。お笑いでマスコミに媚を売っているあるエコノミストは、「長銀をそのまま国有にしておいた方が損害が少なかった」等と的はずれなことを云っていたが、新生銀行が垣間見せた銀行像が金融村の中で互いに傷を舐めあっていた既存の銀行に大きな刺激を与え、経営改革を急がせたのは事実だと思う。私の個人的見解かもしれないが、どうもそのように見える。

私が申込書を貰ったパワー・フレックスという預金口座は、ATMが全国6万カ所無料で、24時間、365日取引可能、ネット利用の振込手数料ゼロ、が売りものとなっている。こんな預金は今までなかった。この預金は大ヒットし、今まで金融債発行を主たる資金調達源にしてきた新生銀行という名の長信銀を普通銀行に変える原動力となりつつある。

又、今までの銀行が手を付けなかった投資銀行的分野にも積極的に進出し手数料収入を拡大した。貸出利息収入が主だった今までの銀行のビジネススタイルを大きく変えた。今でこそ多くの銀行が手数料手数料と叫んでいるが、そうした動きの一步先を行くものだった。

もちろん、私も外資系ファンドを礼賛しよう等という気持ちはない。ただ、変わらなければいけないものが容易に変わらない時、あるいは内部からの力に限界がある時は外からの力が有効であるのは間違いないと思うのだ。

商業系のアイワイ銀行、メーカー系のソニー銀行、商社系のイーバンク、そして4月に誕生する中小企業専門の日本復興銀行。こうした銀行群の動きが確実に既存金融機関に変化を促す。そうした意味では、新生銀行も、最早昔の長信銀ではなくその名の通り新しく生まれた銀行と見る必要がある。

今、日本の銀行は大きく変わりつつある。理由の一つ、変わらなければ存続していけないからだ。ただ、その足取りは依然として重たく遅い。銀行が特別な存在だった時代は疾に過ぎ去ってしまったことを認めたくないのだろうか。

新生銀行はそんな狭間で上場した。新しい銀行像がなんたるか私達に見せて欲しい。そして、更なる株価上昇で株式市場に刺激を与えて欲しい。